

会報

2021年9月号

東京アルコウ会



尾瀬ヶ原より燧ヶ岳を望む

◆ 9月集会、委員会

期日：9月26日(日)

Zoom会議に変更

委員会：13:00～14:30

集会：15:00～16:30

◆ 10月集会、委員会

期日：9月26日(日)

於：赤城生涯学習館/教養室 A (予定)

委員会：13:00～14:30

集会：15:00～16:30

<山行計画>

1. 10月3日(日)八王子城跡ハイキング L 久住

集合：高尾北口バス停8:30am

コース：八王子城跡バス停9:00→八王子城跡ガイダンス→御主殿跡→曳橋→石垣→御主殿滝→ガイダンスに戻る10:30→東屋→展望台11:30(昼食)～12:30→本丸跡12:45～13:00→滝分岐→松竹バス停14:44[霊32]高尾駅北口行⇒高尾駅北口15:03 着

コースタイム：3時間(実際は4時間程)

2. 10月17日(日)100周年記念高尾山集中親睦山行

L 窪田

(9月19日の予定を延期、緊急事態宣言が解除されていることが実施の条件とする)

*会員向け別紙を参照願います。

山行報告 山行回数 No.5729

○ 2021.8.22 (日) 曇のち晴れ

陣馬山 =係 久住=

参加者：L 久住、久住(三)、松井、武田、成田、小國(合計6名)

JR中央線高尾駅前バス停に集合。空は雲に覆われている。射すような日射しがなくてほど良い。バスは臨時便を出しており、混まなくて済みありがたい。市街地を通り抜け、山間の谷川沿いに登って行く。ほどなく陣馬高原下バス停に着く。古い民家が立ち並び、旧街道を思わせる。

民家の中の道を進み、Y字路に。我々には左の道

は、個人宅の敷地に入りそうに思え、右の比較的立派な車が通れる方の道を選んだ。左に柵沢溪流の爽やかなせせらぎを聞きながら杉林の道を登って行き、陣馬新道分岐点に出た。当初コースから外れたが、このまま陣馬新道コースで登ることとした。溪流を渡り柵沢の支流に沿って登り、尾根に上がり急登坂を登る。登山道は杉や檜の根に覆われ、凹凸が激しく、足場に注意しながら進んだ。尾根道の急登坂は延々と続き、休憩を随所でとった。次々と登ってくる登山団体の人に抜かれる。尾根道を登ってきたのだが、この道はいつの間にかなだらかな谷道になった。登りでも今までの急登坂に比べればなだらかなり楽である。いつの間にか杉林は自然林になっていた。三叉路を過ぎ、次のT字路を右へ進

み、山腹の急な登りに。今までの尾根道よりはなだらかではあるが、疲れ切った足にはきつい。

尾根上に出た。風景は一変し、高木がなく素晴らしい見晴らしである。目の前の高台に白馬像がある。白馬像まで行き、山頂を極めたことを確認し、茶屋のテーブルを借り昼食とした。風は涼しく吹き



抜け、遠くの山々、町も見える素晴らしい景観の中で、ゆっくりと体を休めた。山頂には登山客が三々五々集まり楽しんでた。西の山脈の上には雲があったが、一瞬切れ目ができ、富士山の一部が顔を出した。

一ノ尾コースで下山することとした。登りの急傾斜に比べ、なだらかな下りである。南の斜面には杉檜の植林、北には雑木林にはさまれた尾根道は進めど進めど延々と続く。広場にベンチ、テーブルが用意されている一



ノ尾テラスに着き、ここで休憩した。出発。さらに下りの尾根道は続く。突然開け農地があった。感電危険の表示の金網を張った堅牢な柵。上には碍子に導かれた電線も見える。通り過ぎると目の下に人家の屋根が見える。降りていくとコンクリートの舗装道路となり、さらに下って行く。沢井川沿いの県道522号線に出る。陣馬登山口バス停でバスに乗り、JR中央線藤野駅まで行き、高尾まで行きここで解散とした。

(記 小國)

<コースタイム>

高尾駅7:30集合。バス発⇒8:10陣馬高原下バス停着下車⇒8:20出発⇒8:45陣馬新道分岐(登山道)

→10:00三叉路→10:30陣馬山山頂(標高855m)～11:45出発→13:00一ノ尾テラス→14:15陣馬登山口バス停着→14:39バス乗車⇒14:50藤野駅着→15:11乗車⇒高尾駅着

山行報告 山行回数 No.5730

○ 2021.9.4(土)-5(日)曇、小雨、一時晴れ
尾瀬ハイキング =係 久住=

参加者：吉田、瀧澤、田村(め)、松井、久住夫婦 合計6名

植物学者である武田久吉の旅行記「尾瀬と鬼怒沼」(日本山岳名著全集 3、あかね書房)によると武田久吉は明治38年7月に初めて植物採取を目的として尾瀬を訪れている。当時はまともな地図も無く現地の人夫を雇い5日程を掛けて尾瀬を探索、尾瀬の自然が「ただに植物学的にきちょうであるというのみでなく、未だかつて他で見ない風景地である」と記している。日本の水彩画普及に貢献した大下藤次郎は上述武田久吉の紀行記に刺激を受け、尾瀬へ写生旅行の為入山、明治41年に「みずゑ」臨時増刊号(尾瀬特集)に紀行文「尾瀬沼」を投稿した。大下藤次郎は滞在中に尾瀬の自然を多数写生している。尾瀬は現在、国立公園に指定されて自然が保護されているが、当時は未開の地であったことが伺える。この自然が今後共維持されることを望む。

上述の明治時代の尾瀬探索に刺激され、夢を抱き続けた中で漸く7年振りの尾瀬ハイキングを実現出来た。尾瀬の紅葉には少し早い9月初めのハイキングとなったが「草紅葉(くさもみじ)」が少しは見れるかも知れぬとの期待をした。

9/4(土)午前6:36東京発の新幹線にて「上毛高原」駅下車、そこからバスを乗り継ぎ10:45に漸く「鳩待峠」に到着した。約4時間の新幹線及び路線バスでの長旅であった。

11:00に鳩待峠を出発、最初の下り坂は足元の石畳が濡れていて少し滑り易かった。暫く進むと平坦な木道になり溪流のせせらぎ、雨に濡れしっとりとした木立の中を約1時間掛けて「尾瀬ヶ原」と「至仏山」の分岐点である「山の鼻」に到着した。

「至仏山荘」向かいのベンチにてそれぞれ持参した弁当を食べた。このような自然に囲まれた中で食する昼食、及び吉田氏に沸かして頂いたコーヒーが何とも美味しい。ただ、残念ながら雲が立ち込めてい

て蛇紋岩が隆起して出来た日本百名山の一つである至仏山の雄姿を見ることが出来なかった。

山の鼻より「牛首分岐」を経て「竜宮十字路」に向かう。抛水林（注1）によって分割された尾瀬ヶ原の最初の湿原区域「上田代」の幾つもの池塘、遠くの山裾の緑を背景にした白樺の景色を心に刻んだ。池塘には可憐な睡蓮の白い花（ヒツジグサ）が咲き、又、湿原の草々の先穂が黄金色に染まり草紅葉の季節が始まっていた。天気が良ければこの池塘に「逆さ燧」が見れるそうだが、幾度かの噴火や溶岩の流出を繰り返し現在の形になっている日本百



名山「燧ヶ岳」の姿はそこからは生憎の重く垂れこんだ雲の中に隠れていて見ることが出来なかった。

次の湿原区域「中田代」でも様々な形をした池塘を見て回ることが出来た。竜宮十字路の手前に「竜宮現象」（注2）が見られるとのことであったが、それまでの大量の降雨の為か周りに水が溢れており伏流点、湧出点での竜宮現象ははっきりと確認出来なかった。

竜宮十字路の先に緑に囲まれた竜宮小屋が趣深く佇んでいた。降雨が少し激しくなってきたのでそこで小休止した。

刻々と変化する天候の中をのんびりと木道歩きを楽しみ15:30には予定通り見晴地区に到着した。水芭蕉、ニッコウキスゲの季節が既に終わり、紅葉が始まる少し前である為、又、コロナ禍でもあり幾つかの山小屋は閉めていた。本日の宿である「燧小屋」も宿泊者は我々以外に2組4名のみで空いていた。山小屋泊では多少の不便は覚悟していたが、個室を確保出来、風呂もあり、食事も満足出来た。夜9時には消灯、早々に床に就いた。

2日目の9/5(日)朝は早起きをして、6時前より散歩に出掛け早朝の尾瀬の風景をカメラに収めた。運良く雨も止んで青空も少し覗き、山裾に重く立ち込

めた雲が這うように流れ、どこか夢に見たような景色であった。



当初の予定では2日目は「尾瀬沼」を經由して「大清水」に向かう積りでいたが、距離も長く我々の歩行速度では大清水手前の「一ノ瀬バス停」の最終シャトルバス時刻に間に合わない心配があることを山小屋のご主人より事前にコメントを頂いたので、2日目はルートを変更し、往路とは少しルートを変えてゆっくりと木道歩きを楽しみながら尾瀬ヶ原より鳩待峠に戻ることにした。

7:40に見晴を出発、竜宮小屋方面に向かわずに「三条ノ滝」方面に進み「東電小屋」を目指した。木々に囲まれた木道を進み東電小屋に到着。朝日が差し込み汗ばんだので東電小屋にて一休みし、ヨッピー川に架かる「ヨッピー吊り橋」に向かった。「ヨッピー」とは何故かアイヌ語の「別れ」、「集まる」に由来するとのこと。ヨッピー吊り橋は頑丈な作りであるが登山シーズン終了後は踏板が外され冬の豪雪に備えるそうだ。

ヨッピー吊り橋を過ぎると、尾瀬ヶ原の広い湿地帯「中田代」に出る。この湿地帯を眺めることの出来る広い休憩スペースがあり、ここで再度吉田氏のコーヒーを頂いた。草紅葉、池塘、白樺の草原を見ながら、広大な景色を堪能し至福のひと時を過ごす

ことが出来た。

木道脇に咲くウメバチソウ、アブラガヤ、キンコウカ等を確認しながら山の鼻を目指した。途中、池塘で生まれたと思われる赤とんぼ（アキアカネ）も我々を迎えてくれた。

山の鼻にて吉田氏のコーヒー付きで山小屋のおにぎり弁当を摂り、鳩待峠に向かう。私は慣れない重い荷物のせいか痛めている右腰が痛みだし、メンバーから右に傾いて歩いていると指摘を受け心配を掛けたが、鳩待峠まで何とか持ち堪えた。

鳩待峠に13:40に到着。此处から地元の路線バスを乗り継ぎ沼田まで行く当初の予定を、吉田氏の発案でジャンボタクシーにて直接沼田まで行くことが出来、帰路が大幅に短縮出来た。

今回は、尾瀬が初めての参加者が多かったので至仏山、燧ヶ岳山行を目指さず、主に尾瀬の木道歩きを楽しんだ。次回チャンスがあれば（来年？）、至仏山登山に挑戦か、尾瀬沼周回まで足を伸ばしてみたい。

（注1） 抛水林

湿原や草原を流れる川の流れて両岸に帯状に続く林。川によって運ばれた土壌や栄養が養分が乏しい湿原でも樹木を育てている。（Weblio辞書より引用）

（注2） 竜宮現象

湿原を流れる小川が、いったん地中に潜り、伏流水となって地中を流れ、再び地上に湧き出す現象。

（Microsoft Bingより引用）

（記 久住）

<コースタイム>

9/4(土) 鳩待峠11:00→山の鼻12:00(昼食) 13:15→牛首分岐14:00→竜宮十字路14:40→見晴／燧小屋15:30(泊)

9/5(日) 燧小屋7:40→東電小屋分岐8:00→東電小屋8:25～8:35→ヨッピー吊橋8:55→休憩ベンチ9:15～9:40→牛首分岐10:15→山の鼻11:00(昼食) 12:10→鳩待峠13:40

山行報告 山行回数 No. 5731

○ 2021.9. 5 (日) くもり

100周年高尾山集中親睦山行

事前ルート調査 =係 窪田=

参加者:L 窪田、廣瀬、延里

9月19(日)の「100周年高尾山集中親睦山行」の事前ルート調査を廣瀬さん、延里さんと3人で行った。



秋雨前線の影響で雨を覚悟していたが幸い一度も降られることなく予定した調査目的を概ね達成する事ができた。

主な内容として

1. ケーブルカーの待ち時間

本番と同じ9時に京王線高尾山口駅に集合。雨模様の天気と緊急事態宣言中のため人出は少なく、待ち時間無しで乗車できた。混雑時には30分以上は並ぶ覚悟が必要と思う。8時の始発から15分間隔で運行されている。

2. ルートの所要時間

当日は4コースに分かれて山頂に集合するが、今日はケーブルカーを降り1号路から薬王院まで20分、ここから30分で高尾山山頂に着いた。その後、もみじ台<細田屋前>まで10分、細田屋で食事を注文する予定でいたが営業しておらず当てが外れた。ここから35分で一丁平到着。ここから折返し、富士見台園地経由、高尾山山頂巻道を使い薬王院からケーブルカーの山頂駅へ75分で戻った。

ケーブルカーの山頂駅から一丁平往復2時間50分の所要時間を確認した。

3. 昼食懇談場所の確認

・高尾山山頂・・・十分なスペースはあるが、休日はいつも混雑しているため大勢での昼食は困難。

・もみじ台・・・・・・スペース、5～6のベンチがあり、混雑が予想される。なんとか場所を確保して対応可能<細田屋周辺>。

・一丁平・・・・・・名前の通り広いス

ペースがあり、特に展望台付近はベンチ多数、広めの無人の休憩舎、近くにトイレもあり昼食懇談場所として最適。但し、高尾山山頂から45分～60分歩くことが必要

・富士見台園地・・・現在、草木におおわれスペース皆無で使用出来ない。

4. 雨天時の昼食懇親場所

・ケーブルカーの山頂駅から高尾山山頂までほとんどの茶店は営業中。しかし席数も少なく、多人数で飛込み、弁当持込みで対応してもらえるか難しい。

・山頂手前の「やまびこ茶店」は120席あり(ネット情報)当日、空いていれば交渉しだいで入店可能と思っている。

5. 弁当の確認

京王線高尾山駅から甲州街道をJR高尾駅方面に5分ほどのセブンイレブン(高尾山インター店)で予約弁当の確認をした。結果、ごちそう善「和(なごみ)」主食まぜご飯、おかず8種類、金額1,080円(税込み)を注文候補とした。指定された期日までに電話で注文し、当日8時30分に店で受取ることを約束した。

6. 高尾山温泉の確認

本番では、下山後希望者の方には入浴してもらおう予定です。今日は入浴を含め入館料1,200円、回数券10枚綴り8,000円の確認をした。

当日は26名が4コースに分かれ山頂に集中し高尾山の地で同じ弁当を食べながら100周年を祝う事を楽しみに事前調査を終えた。

(記 窪田)

<コースタイム>

京王線高尾山駅集合9:00→清滝駅9:15→高尾山駅(霞台)9:20→9:25→薬王院9:45→高尾山山頂10:15→10:30→もみじ台(細田屋前)10:40→11:05→一丁平11:40→11:55→富士見台園地経由もみじ台分岐12:30→高尾山山頂巻道・薬王院経由霞台13:10→13:30→(1号路下山)京王高尾山駅14:20→(セブンイレブン往復)京王高尾山駅14:45

随想

山に親しみ山に想う (40)

—またぞろ昆虫に興味—

(記 岡本)

この歳になって、またぞろ昆虫に興味を持ち始めた。その切っ掛けは、孫の虫捕りの対象がダンゴムシに飽きて蟬、カブトムシ、バッタなどの昆虫に変わったことである。昆虫捕りなら昔とった杵柄ではないが、捕り方を伝授してやれるぞという眠っていた「稚氣」が澎湃として蘇ってきたのだ。孫と近くの小金井公園で昆虫捕りをした。昆虫への接近の仕方や捕虫網の使い方の手本を見せながら教えた。孫が幹に網を近づけると、偶々蟬の方から網に飛び込んで来て捕れた。孫にとって自力による初の蟬捕獲である。孫の嬉々とした表情、それは爺さん冥利に尽きるものだった。

子供に人気のある虫捕りは、昆虫綱のコウチュウ目(鞘翅目)、バッタ目(直翅目)、トンボ目(蜻蛉目)、チョウ・ガ目(鱗翅目)などの昆虫だ。学校の理科で昆虫はどんな虫か教わった。外骨格に守られた頭部、胸部、腹部に分かれ、胸部から三対(6本)の脚と二対(4枚)の翅(痕跡のみもある)が生え、幼虫から脱皮、羽化の変態をして成虫(完全変態は蛹から、不完全変態は幼虫から成虫)になるという特徴をもつと習った。昆虫は見つかっているだけで100万種以上で、全生物の約6割である。昆虫の中で最多はコウチュウ目で約35万種、地球上で最も「種数」が多いグループという。次にチョウ・ガ目(約16万種)、ハチ目(約15万種)、ハエ目(約15万種)の順で、コウチュウ目は昆虫綱の8割を占める。トンボ目(約6000種)、バッタ目(約2200種)、カマキリ目(約2300種)などは分類上劣位にある。昆虫は地球上のどこにでも棲んでおり、唯一棲んでないところは、海中だけという(海上には海アメンボが棲む)。我が国には昆虫は約3万2000種が棲む。

自分は終戦前年の生まれ、団塊世代(1947年～1949年生まれ)の前の焼け跡世代(幼年期と少年期を大戦中に過ごした世代で1935年～1946年生まれ)である。子供の頃、大阪市内の都会にもまだ空き地がふんだんにあった。到るところに草っ原や田畑があった。戦争の残滓である爆弾池(爆弾跡に雨水が溜まってできた池)が幾つか残っていた。家の近くに小魚、ザリガニ、種々の虫が棲息していて、それらを捕るのが遊びであった。小学校に上ると夏休みの課題として昆虫採集が出されて、蓋付のYシャツ紙箱を標本箱にしたのを覚えている。戦後の復興が進むなかで、近所にあった生き物の棲息地は、新設高校、市営住宅などが立って住宅街となってしまい、中学生に入る頃には消えていった。都会の子供

で近くの草っ原で虫捕りができたのは、地域にもよるが概していつ頃までだったのだろう。団塊世代までだったろうか。東京では1964年のオリンピックを契機に高速道路拡充、高層ビル建設、河川の埋立が一挙に進んだ。それに伴い、虫の棲息地が激減、虫は棲む環境には相応しくない都市公園に追い詰められた。虫捕りは子供の普通の遊びではなくなっていった。

山好きを山屋というように、虫好きが昂じて大人になっても虫捕り、昆虫標本造りの趣味に没入している者を「虫屋」と称している。この虫屋が最近めっきり減ってきているという。焼け跡世代では10人中8人は虫捕りを楽しんでいたのではないか。そんな世代でも虫屋になる者は少なかった。虫屋になるのを阻害する要因は幾つかある。受験勉強を強いられること、虫で食っていけるのかと詰問されること、就職して仕事に没頭せざるを得なくなること、結婚した後は虫と私とどちらが好きなのかと迫られることなどで、これらの関所を無難に通り切るのは難しい。

関所を通過された著名人の虫屋にどんな方がおられるのだろうか。養老孟司(解剖学者、「バカの壁」の著者、1937年生)、鳩山邦夫(大臣歴任、1948年生、67歳没)、福井謙一(ノーベル賞科学者、1918年生、79歳没)、北杜夫(小説家、精神科医、「どくとるマンボウ昆虫記」著者、1927年生、84歳没)、奥本大三郎(仏文学者、ファール昆虫館館長、1944年生)、池田清彦(構造主義生物学者、1947年生)、村田泰隆(村田製作所社長、1947年生、71歳没)、若いところでは、やくみつる(漫画家、日本昆虫協会副会長、1959年生)、香川照之(歌舞伎役者、1965年生)、さらに各界の著者人がおられるが、ほどほどにしておきたい。ここに挙げた大方の虫屋はやく、香川を除き焼け跡世代から団塊世代頃に生まれた方々である。

虫屋という言葉もなかったであろう明治、大正、昭和初めの世代で著名な文学者の虫好きを紹介する。小泉八雲(1850年～1904年)、志賀直哉(1883年～1971年)、室生犀星(1889年～1962年)、広津和郎(1901年～1968年)などである。我が国の昆虫文学を語るとき、八雲は避けて通れず作品の質量とも抜きん出ているという。「セミ」「トンボ」など虫の名前の作品や「虫の楽土」が評価が高く、またハエや蚊も扱うだけで叩くことはなかった。志賀直哉は虫を扱ったものとして「城の崎にて」、「豊年虫」な

どがあり、「城の崎にて」では「虎斑の大きな肥った蜂」について愛情あふれる描写をしている。室生犀星は鳴く虫がとりわけ好きで「虫寺抄」で秋の虫が登場する。蝉などの虫を題材にした詩も多い。広津和郎は幼い頃からファール昆虫記の愛読者で「あおまつむし」など虫の作品がある。この時代の文学者の日常周辺には虫が普通に棲息していたので、虫を主題にしたり、虫を登場させた作品が多い。虫と疎遠になりつつある昨今、虫を主題又は描写した作品を発表している小説家にどんな方がおられるのだろうか。



写真は糞虫で最大のダイコクコガネで絶滅危惧種 2類(了)

参考図書=「虫の文化誌」小西正泰著、昭和52年朝日新聞者刊、「昆虫少年記」梶原精一著、1996年朝日新聞社刊、「観察する目が変わる昆虫学入門」野村昌史著、2013年ベレ出版社刊、「三人寄れば虫の知恵」養老・奥本・池田の鼎談、平成13年新潮社刊

コラム

「虫こぶ」について

(記 久住)

尾瀬で撮った写真です。透き通った赤い木の実かと思っただけは「虫こぶ」で、中に蜂の幼虫が入っています。驚きです。越冬して翌年孵化します。



虫こぶとは「虫えい」とも呼ばれ、ダニ、アブラムシ、タマバエの幼虫など、さまざまな虫が、植物に寄生することでできる部分と言う。(樹木図鑑より)